

茶の湯のころ

私は現在、大和遠州流の家元の下で茶道を学んでおり、先日の免許式で「行皆伝」という免許をいただきました。行皆伝というと偉そうですが、全くそんなことはありませんで、この道では、下から数えた方が早いというレベルです。何事も芸事というのは、奥が深いという事です。

ところで、お茶を飲むという習慣は、平安時代に中国から遣唐使によってもたらされたといわれていますが、当時の日本人は、お茶を薬として飲んでいたので、喫茶という習慣は根付かなかったようです。その後、鎌倉時代に入り、お茶の栽培が普及するとお茶を飲むという習慣が一般に普及するようになります。更に、室町時代になると、本場中国の茶器を「唐物」として珍重し、大名の間でも、派手な茶会が催されるようになります。こうした風潮に異を唱えたのが村田珠光という人で、彼の手によって、簡素静寂を重んじたいわゆる「わび茶」の源流が誕生します。村田珠光の「わび茶」は、堺の豪商、武野紹鷗に受継がれ、千利休によって完成します。この千利休の「わび茶」によって、喫茶という行為は、芸術的にも洗練され、極めて精神性の高いものになりました。

その後、千利休の「わび茶」は、古田織部、千宗旦、小堀遠州などの手を経て、今日に至っていますが、現代に繋がる茶道は、単に千利休の「わび茶」の形だけを真似、伝えてきたものではありません。多くの先達が、千利休の「わび茶」を進化させるだけでなく、時代の変化に合わせて、工夫を重ねてきたからこそ、今も、茶道は生命力を保ちえているのだと思っています。

茶道を英訳する際は、「tea ceremony」というのが一般的なのですが、確かに、外国人から見れば、茶を点てる所作は厳かな儀式に見えるのだらうなと思います。しかし、この儀式について、岡倉天心が「茶の本」の中で「茶や、花や、絵などで織りなされた筋をもつ即興劇である」と述べているように、重要なことは茶を点てる形式的な所作にあるのではなく、形を越えたところにあ

と思っています。

亭主はお客様に対して、誠心誠意、おもてなしの心を尽くして接しなければなりません。客もまた、そうした亭主の心遣いに、感謝の心を持って答えていく必要があります。

客に対するおもてなしの心を形とするために、長い年月の間に、茶を点てるための動きは、無駄を削ぎ落とし、洗練されてきました。その意味では、表に見える形を疎かにしてはいけませんが、亭主と客が、互いの所作を通して響きあう、いわば無言のコミュニケーションこそ大切にすべきものなのです。

茶の湯の世界では、「賓主歴然」「賓主互換」という言葉があるそうで、これは、亭主と客は歴然と分かれているが時に入れ替わる瞬間があり、その瞬間の繰り返しがお茶の醍醐味である（千宗屋著「もしも利休があなたを招いたら」）とのことですが、茶の湯の入り口でうろうろしている私は、残念ながら、その心境には遠く及びません。（塾頭 吉田 洋一）